

## 地域安全まちづくりセミナー議事録

日時：平成19年3月22日（木）

14:30～15:30

場所：兵庫県公館大会議室

司会

ただいまより、地域安全まちづくりセミナーを開催させていただく。

本日は「子どもを守る安全なまちづくり」をテーマに、千葉大学教授の中村攻様よりご講演をいただく。

中村様は、地域計画学・環境造園学がご専門である。近年、子どもが被害者となる犯罪が通学路など、子どもたちがごく普通に生活する空間で発生していることに着目して、地域計画学の立場から公園、緑地、広場、街路など、まちのオープンスペースに潜む危険な空間的要因についての研究を行っている。

本日は、これまでの研究内容や経験を踏まえた興味深いお話が伺えるのではないかと思うので、ご静聴いただきたい。

中村千葉大学教授

ただいま紹介いただいた私が勤める千葉大学農学部の緑地環境学科は、全国の国立大学の中でたった1つ公園をつくる専門家を養成する学科であり、私の教え子も神戸市役所や兵庫県庁などで公園行政に携わっている。私は、公園だけではなく、もう少し広く都市計画というか、都市全体のあり方について研究している。

私は、学生のころ京都にいたので、神戸には何度も来ており、震災の時には、長田地区などの調査研究をさせていただいたし、それから「酒鬼薔薇事件」も神戸で発生したが、あの事件の現場についても何度も調査をさせていただいた。

私に与えられた時間は限られており、皆さんとの質疑の時間も含めて60分なので、単刀直入に本題に入っていきたい。

お手元の資料の中に、私が朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、それから地元の神戸新聞などで取り上げられた記事が掲載されているので、後ほど研究の全体像をつかんでいただければ幸いである。

私は、主に子どもたちの生活を追いかけ、どんな公園をつくるのがいいのかという研究を40数年してきた。その中で、ちょうど今から20年ぐらい前に「宮崎事件」という東京で起こった犯罪に出会った。最近、死刑の判決が犯人に対して下った事件であるが、4人のお子さんを誘拐して殺害したという事件が宮崎事件である。私は、それまで子どもたちの生活を調査して、子どもたちのために、都市の中の公園や緑地を少しでも多くつくっていくことが大事なことだと思い、研究を続けてきたが、あの事件は、研究者にとっては衝撃的な事件であった。

宮崎事件では、東京と埼玉で合計4件の誘拐殺人事件が起こったが、あの事件が1つの契機となり、子どもたちが痛ましい犯罪の犠牲になるという事件が毎年のように起こるといった状況になったのであり、日本の社会を揺るがすターニングポイントであったと思う。あの宮崎事件で東京の事件現場になったのは、東京都住宅供給公社がつくった住宅団地の公園である。それは、結構緑も多い団地であったが、その公園で誘拐され、連れ出されて殺されたという事件であった。

公園というと、日本の都市では、住民1人当たりの公園緑地面積が1人当たり約6～7平方メートルであるが、ヨーロッパの都市になると、20平方メートルとか30平方メートル程度であり一桁違う。日本の都市は緑地が少ないので、少しでも多く公園や緑地をつくることが子どもたちにとって大事なことであると信じて仕事をしてきたし、教え子たちにも指導をしてきたが、その公園で子どもが誘拐されて殺されるという事件が起こった。私たちが、

子どもたちのために一生懸命つくった施設に子どもたちがやってきて、そこで命を落とす。一体、子どもはどこで遊ばばいいのか、ここも危ないのであれば、一体子どもはどこで遊んだら安全なのかという問題に直面したと思う。

ちょうどあの事件を契機にして、学校でも夏休み前になると子どもたちに、こういう場所は地域で危ないから、なるべく行かないようにという指導をされるようになったが、その中に地域の公園が含まれるようになったきた。私たちが子どもたちのために、つくっていかようとしている公園や緑地は、子どもたちにとって危ないからなるべく行かないようにと指導される施設になってきたのである。

最近では、非常に緑地が多い団地も増えており、大きなケヤキ並木の通りだとか、非常に緑が多いまちをつくれるようになってきたが、そこに住む人たちから、この宮崎事件を1つの契機にして、昼間は安全だが、夜は危険だという緑の多いまちの作り方をやめていただきたいという要望があった。知らない人が住宅の足元まで入ってくるようなまちは危ないということで、問題視されるようになってきたのである。それで私は、日本の社会もただ公園の中に緑を増やせばいいという時代でなくなってきたと思った。犯罪からの安全ということを考えないと、やがて日本人は、身近にある緑を歓迎できない時代が来ると思い、本当に緑豊かなまちをつくっていくという意味合いから、安全ということをもう少し考えたまちづくりをしていかなければいけない時代がきたことに気づき、研究を進めることにした。

皆さんに身近なもう1つの事例は、いわゆる「酒鬼薔薇事件」である。この事件が発生したのは、神戸の北須磨で、丘陵地を切り開いた数万の新しい団地であり、そこで彼は2人の子どもの命を奪っている。そのうちの1人は、団地の中にあるタンク山という緑がある場所で殺害され、友が丘中学校に生首が置かれていたのである。このタンク山は、開発の途中で、全部団地にしてしまうのは、申し訳ないと思ひ、開発の中で残した場所である。しかし、

そこが犯行現場になったのであり、ただ緑があるだけでは危険であるということが明らかになったのである。

また、あの犯人は、数カ月前にも女の子を殺している。その事件現場の近くには公園があって、私も調査に行ったのであるが、そこはとても犯罪を行える場所ではなかった。周りの住宅地から住んでいる人たちの目線が注がれているのである。そのため、犯人は、女の子に「水飲み場を教えて」と声をかけ、女の子を先導させ、高さ3メートルぐらいの木がある小学校の正門前の通学路で女の子を殺害した。その事件が起こったときには、本当にきれいな緑の廊下のようになっていた。しかし、それが死角を生んでしまった。最初に木を植樹するときには、樹高も低く、間隔もあけて植えられていたが、何年か経つと木が大きくなり、見た目にはきれいな緑の廊下が続いているような感じになっていたものの、そこが犯罪現場になったのである。

つまり、酒鬼薔薇事件も宮崎事件と同様に、もともとあった緑と、団地をつくるためにわざわざつくった新しい緑が、犯罪の現場を提供してしまった事件である。

これからも緑豊かなまちをつくっていかねばならないが、犯罪からの安全をもう少し考えないとうまくいかないときが来ると考え、私は、まず最初に犯罪の状況がどうなって、子どもたちを取り巻く犯罪の状況がどうなっているか、現状を知ることから始めた。宮崎事件の後、警視庁と千葉県警に行き、子どもたちを守るための研究がしたいので、犯罪のデータを見せていただきたいというお願いに行き、趣旨をご理解いただいて、データを開示してもらった。しかしながら、提供いただいたデータは、シンナーを吸った、万引きをしたという犯罪者として子どもが出てくるものばかりであった。

普通の子どもがどこでどういう形で犯罪の被害者になっているのか、どこで犯罪に巻き込まれているのかというデータが欲しいというお願いしたのであるが、そういうデータの整理はしていないことがわかった。警察は、犯人

を捕まえる機関だから、犯人の方からアプローチするのが基本である。最近では少し角度を変えて、被害者の方からも情報を少し開示するという事もやっているが、基本的にはこのスタンスは変わっていない。

事件が起こると、各地域で子どもたちの登下校時の安全を確保する活動が盛んになる。しかしながら、実際には、地域のどこで子どもたちが危ない目に遭っているのかという実態すらわかっていない。皆さんの地域で、子どもたちは結構危ない目に遭っているのであるが、自分たちの地域で子どもたちがどんな危ない目に遭っているのかという実態すらわからない状況であるということは、まず皆さんに説明しておかなければならない。警察を含め、行政機関でも子どもたちが日常的に、どこで危ない目に遭っているのかはわかっていないのである。

私は、自分で実態調査するしか方法がないと思い調べ始めた。3～4万人の子どもたちを対象に調査してきた結果、大都市部では、小学校高学年の3～4割前後の子どもが何らの形で犯罪の危険に遭っていることがわかった。

私が初めて自分で調査したのは、東京のベットタウンである千葉県の市川市や松戸市である。それぞれ人口約50万人の都市であるが、その農地や駅前、高層住宅地、一戸建て住宅地、工場地帯などに建っている学校の約6,000人の子どもを対象にして調査を実施した。そうすると、地域に関係なく、どこの学校でも4割前後の子どもが犯罪の危険に遭っているというデータが出てきたことに驚いた。日本の大都市部で生活する子どもたちは、蔓延する犯罪の危険と背中合わせであるという認識が必要であると思う。

それ以降、積極的にこのような調査を続けていたところ、全国的に私の調査法を使って、自分のところでも調査をしたいという人が増えたため、この調査法を教えた結果、全国的なデータが集まってくるようになり、大都市では3～4割、地方都市でも2割前後、農村部でも1割前後の子どもたちが犯罪被害に遭っている現状がわかってきた。学校の統廃合が問題になっている

ような地域の学校でも、車から声をかけられて犯罪被害に遭っており、子どもたちが犯罪に遭う危険が、蔓延してきている社会になってきたのではないかと思う。

このように、子どもを対象とした犯罪が身近に発生するため、ボランティアで子どもたちを見守る活動が盛んになっている。そこで、ボランティア活動の現状と課題というところに踏み込んで、お話をさせていただきたい。

約2年前に、岐阜県でパチンコ屋の廃屋に女の子が連れ込まれ、殺されたという事件が起こった。まちの中の使わなくなった空間であり、適切に管理されていない廃屋でこの事件が起こったのであるが、中津川の警察の方から、平成14年度には中津川の防犯ボランティア活動団体はゼロだったが、その後の4年間で28団体まで増えた。その結果、平成14年度には犯罪件数が1,160件あったのが、平成17年度には862件へと減少したという話を聞いた。防犯ボランティア活動と犯罪の件数には相関関係があり、一般的に防犯ボランティア活動によって、犯罪件数もある程度と減少したと言えると思う。

盛んになっている防犯ボランティア活動ではあるが、課題が出てきている。全国的な統計調査を行ったわけではないが、子どもたちの登下校時を中心として、地域で子どもたちを守っているボランティア活動の担い手の8割は高齢者と言われており、あとの約2割は父兄やPTAなどであると言われていいる。防犯ボランティア活動に取り組む人は、高齢者と若いお母さんたちが中心になっているのであるが、活動の継続が大きな課題となっている。去年の12月に栃木の今市市で女の子が下校途中に殺されて、いまだに犯人が捕まっていない。このため、この地域では、すごい勢いでボランティア活動が活発化しているのであるが、NHKの番組に出演した際に活動に取り組んでいる人から「いつまでやればいいのか」と聞かれた時に返答に困り、継続するしかないと言えなかった。いつまでボランティア活動をやめるのか、それが

大きな問題となっている。

立ち入って考えてみると、1つは高齢化という問題がある。高齢者の団体に活動しているのに高齢化が問題になっている。川崎市で15階のマンションから子どもが突き落とされて殺されたという事件があり、川崎市に招かれて話をしたが、その時にも担い手の高齢化という問題が話題になった。高齢者が何年も活動をしていると無理が利かなくなったり、自分の体が心配で毎日ではできにくいという理由で、活動する人数が減少したり、若いお母さんなどのPTA関係者もパートなどで働いているという理由で参加しなくなるなど、活動を継続させることが大きな問題となる。

また、同じ地域内で活動に参加する人としめない人の間で確執が生まれたり、あるいは参加している人たちの間でストレスが生まれるという問題がでてくることがある。こういう問題で大きな事件に発展したのは、滋賀県の長浜市で保育園か幼稚園の送迎を当番制で行っていた母親が、よそのお子さんの命を奪ってしまった事件である。ボランティアで子どもたちを守っていく活動をしているうちにストレスがたまって事件に発展するという問題まで生まれ、継続という問題が大きなテーマになっている。活動を止めたところに事件は起こる。毎日ボランティア活動をやっていたら犯人は何もしないが、終わったところを見計らって事件が起こるのである。

それ以外には、集団下校の問題がある。下校時間には差があり、初めは学校もみんな帰るようになっているが、小学校の1年生と6年生では学校での生活スタイルが違う。5年生、6年生になると帰りも遅くなって来るし、学年によって学校から帰ってくる時間も違えば、個人によって差も出てくることから、日常的に下校時間にばらつきがあるものを合わせるとなると、学校運営に相当無理な問題が出てくる。

もっと別の問題としては、集団下校をしても最後は1人になってしまい、それから犯罪被害に遭うことが多いということである。川崎市の事件でも、

被害にあった子どもは、自分のマンションの15階まで上がってきて、もう少しで自宅というところで被害に遭っているし、秋田県の藤里町の事件でも、被害児童は家まで80メートルぐらいまで帰ってきてから被害に遭っている。最後はどうしても1人になってしまうのであって、結局、1人になったところ事件に遭うということはどうするのかという問題も出てきている。

また、活動資金の問題も出ている。メンバーを固定して登下校時の安全を確保する活動をやろうとすると、通知文なども発送しなければいけない。そうすると、そのお金は誰が出すのかという問題が出てくる。日常的に活動を継続するためには、責任を持ってコアになるメンバーを決めてやっていかなければならない。ボランティアと言えども、防犯グッズなどの日常的な運営費がかかり、一生懸命取り組むほど問題が出てくるのである。

それから、何かあったときの責任問題についてである。これはいろんな責任があると思う。例えば、高齢の夫婦が子ども110番の家として活動しており、そこに犯人に追われて子どもが逃げ込んできて、高齢者夫婦が犯人と対峙した場合、その場で子どもを守るために、犯人と格闘してけがをしたら誰が責任持つのか。また、実際に子どもが被害にあった場合にその責任を誰が持つのだろうかということが、活動をしていく上で問題となってくる。

もう少し違う視点から見ると、子どもの登下校については、別の課題がある。それは、特に子どもの視点に立ったときに、下校の楽しみがなくなっていることである。下校時には、お父さんやお母さんがいる地域に帰ってこれから遊べるという楽しい気持ちになるものである。自分が子どもころでも、いろんな道草しながら地域を知り、社会を知ったものである。それを排除して「はい、一列に並んで、まっすぐ歩いて」と毎日のように集団下校をするのは、子どもを育てていく面でどうかと思う。もう少し子どもを心豊かに育てていく中で安全の問題も考えていく必要がある。親や大人の監視下に子どもの生活をはめてしまっているのであるが、子どもは、学校では先生に、家



庭では親に保護されているけれども、地域では友達などと、大人が見ていないところで冒険をしながらたくましさを身につけていくべきだと思う。

一生懸命考えて、活動に取り組んでいる人ほど、継続という問題が出てくる。子どもたちを犯罪から守るボランティア活動を続けて行く中で起こる様々な問題に、どう対処するのかが問われていると思うのであるが、ある程度の活動を続けるためにあたって必要なことと、3年や5年先といった中期的な活動を継続するためにという二段階に分けてお話をしたい。

まず、半年、1年、2年といったある程度活動を維持して続けていくためにはどうすればいいかということであるが、1つは、活動を行っている高齢者やお母さん、地域の人たちや学校、子どもたちとの交流を深めていくということである。活動が役に立ち、感謝されていることが活動している人たちに実感できないと続いていかない。そのためには、子どもたちやPTA、学校の教師などと活動している人たちが交流をしていくような機会を設け、自分たちの活動が本当に子どもたちを守っていく上で役に立っていると実感できるような機会を設けることが大事だと思う。年をとっても人間は、やっていることを「ありがとう」と言われて初めてやりがいがあるのである。活動している人と子どもの保護者が年に何回かは交流する場を設け、親たちの要望も聞き、そして子どもたちの要望も聞くことで、活動をしている人たちの心意気が伝わっていくことが大事だと思う。

2つ目は、広報をしていくということである。地域の人たちに、町会や自治会などの回覧板を通じて、活動をしていることを地域全体の人に知らせると、頼まれたから仕方なしに活動しているという意見は出なくなり、地域全体に活動している人たちの気持ちが伝わっていくと思う。

それと同時に毎年、年に1回は新しい会員の呼びかけをすべきだと思う。広報活動をベースにして、毎年、新しい人を補充していかないと高齢者を中心にした団体は必ず減少していく。だから定期的な呼びかけをすることが大

事だと思う。

3つ目には一定の予算であり、事務連絡や広報活動などの活動には、活動費が必要であると思う。この財源をどうやってつくっていくのかは、それぞれの地域によって異なり、企業から募金を募っているところなど様々であると思うが、ボランティアの人たちに活動資金まで全部負担させるのではなく、そこは行政的の補助なども活用し、最低限の負担とすることが大事である。

この3点を中心にして活動を実施していけば、ある程度活動も続き、その内容も地域社会の中に浸透していくと思うが、学年によって下校時間が異なる子どもたちや、一度帰宅してから外出する子どもたち全体を守っていくとなると明らかに限界がある。そこで、3年、5年先を考え、どういう発想の転換が必要なのかということをお話したい。

まず、多発する犯罪に対して、何故我々の社会がもろくなってきたのかという点について考えていきたい。最近、各地で様々な活動が行われているが、どの程度有効なのか、また、何が欠けているのかを考え、犯罪の原因を取り除くような活動を展開しなければならない。

犯罪増加の大前提として、行き過ぎた競争社会が犯罪者を生み出しているという問題はあるが、これはあまりにも大きな社会全体の問題であるため、頭の片隅で意識しつつ、地域でどのように子どもを守っていくのかということに限定して問題点を指摘したい。

1つは、地域や自治体の認識不足ということである。

子どもたちが毎日生活している場所には、日本の場合、犯罪など起こらないという大前提があった。学校で犯罪が行われるという前提で学校をつくっていないし、公園で犯罪が起こると認識して公園をつくっていない。また、通学路で犯罪が起こると認識して道路をつくっていないし、団地をつくる場合でも犯罪が起こることを考えないでつくっている。

日本人は、安全神話の上にどっぷりとあぐらをかいて毎日生活しており、

安全対策といえば、せいぜい空き巣対策ぐらいしかしてこなかった。空き巣も窃盗犯という犯罪ではあるが、身体的な被害に発展することにならなかった。そのため、風俗犯や粗暴犯など直接体に危害が加えられ、対応ぶりによっては命まで落とすという犯罪なんか起こらないという前提で、特に子どもが生活している場所がつくられているのである。しかしながら、近年、急速に欧米化して、犯罪が多発する社会へと変貌をとげてきたため、至るところに危険な場所が出てきており、地域の中に危ないところが増加している現状にある。

そこで、子どもたちが毎日生活しているところで、犯罪が起こるかもわからないという視点で地域を見直す必要がある。学校や公園、通学路など子どもたちが生活している場所を、犯罪が起こるかもしれないという視点で見直して、そして改善していくことが1つ目のテーマである。

2つ目の課題は、昼間に地域で大人の姿が見えなくなっているということである。

住宅はたくさんあっても、駅前やショッピングセンター等に行かないと、昼間は空っぽという地域が増えている。昼間に地域の大人の姿が見えない建物もたくさんある。そのような地域で子どもたちが学校や塾などから帰ってくる。そこに子どもたちを見守る地域の大人の姿がないということでは、誰が子どもを守るのか。守りようがない。昼間に地域の大人の姿が見えるまちをどうやってつくっていくのかが、大きな2つ目の課題だと思う。

働きに行っているため、昼間に大人の姿を見せるのが無理であれば、安全を確保することも無理である。こういうときに考えなければならないのは、子どもたちと24時間、365日地域で生活される高齢者の人たちの力である。高齢者の人たちに、今のように肩をたたいて防犯ボランティア活動をお願いするという取組では、中長期的にはだめだと思う。若い人も含め、高齢者の人たち自身が楽しいと思えるようなまちを、どうやってつくっていくの

かというテーマに、私たちは挑戦しなければならないと思う。

全国的にはいろんな事例がある。例えば、東京都葛飾区では、地域の中に、5つの公園がある。その5つの公園を歩くと1.8キロになる。その5つの公園に高齢者用の健康遊具を置いた。こちらの公園は足腰を鍛える健康遊具が3種類、こちらの公園は腕の筋肉を鍛える健康遊具が5種類、こちらの公園は平衡感覚を養う健康遊具が4種類などといった種類のそれぞれ異なる健康遊具を置いた。年をとると健康を維持していくということは大事なことであり、高齢者からの要求でもある。そこで、健康維持を兼ねて公園へ出てきてくださいと呼びかけを行い、高齢者によって、公園で遊ぶ子どもたちを守っていただくという取組を行っている。高齢者が健康に留意して生きたいという要望を、地域の行政を含め、みんなでまちづくりを進めることによって、高齢者たちが元気になる。そういうまちをどうやってつくっていくのかではないか。

東北のある町に行ったときのことであるが、その町では「3つのどうぞ」という活動を行っている。

1つは、「ベンチをどうぞ」という活動である。その町に行くと、いたるところにベンチがある。年をとるとやっぱり休憩が大切である。ベンチで休みながら、地域に出てきてくださいという活動である。

2つ目に、「傘をどうぞ」である。年をとると、外出途中で雨が降ってきたからといってすぐには帰れない。途中で雨が降ってきたときは、ベンチのところに置いてある傘立ての傘を使ってもらい、家の近くにあるベンチの傘立てにおいてもらう。学生などに盗まれることもあるらしいが、それでもめげずに大きな公共的な施設のところにはちゃんと傘が置いてある。

3つ目は「トイレをどうぞ」である。楽しく地域を回りたいと思っても、トイレが心配である方が多い。しかし、普通の民家でトイレ貸すと、別の危険が出てくる可能性がある。だから、その町では、工場や商店、事務所、公

的な施設などに「トイレをどうぞお使いください」という張り紙をしてくれている。そこに用事がなくても使ってもらっていいという意思表示をしている。

以上3つの「どうぞ」などで高齢者の要求を聞きながら、元気に楽しいと思えるようなまちをつくっている。これからは、こういう視点に立ったまちづくりを進めていかないと、何もせずに高齢者の人に活動をお願いするだけでは、余りにも虫が良すぎると思う。

3つ目の課題は、子どもを育てていく大人のコミュニティをどうつくっていくのかということである。

近年、地域とのつながりがなくても生きていけると思っている人が増えてきている。これはバブル期から高度経済成長期に私たちが陥った錯覚である。子どもたちは、紛れもなく地域の学校や友達などの間で生活している。地域の友達と地域の学校に行き、毎日、地域で生活している。しかし、そこに住んでいる大人たちが、ほとんどその地域に興味を示さないとすれば、これほど子どもたちにとって危険なところはない。そういう意識では、自分の子どもすら安全に育てることができなくなっているということに、そろそろ気づかなければいけない。だから若い人から高齢者まで、地域で子どもたちを育てていくためには、どういうコミュニティをつくっていくのかということが、非常に大きなテーマになっていると思う。

子どもたちに対する安全教育ばかりして、大人は何もしないというのでは、いけないと思う。むしろ私たち大人の責任で、激変劣化した子どもたちの環境を私たち大人が自ら行動することによって改善するということが、社会的に大事だと思う。

司会

先生の貴重なお話を受けて、何かご質問があるという方は挙手願いたい。

聴衆（男性）

普段、防犯パトロールをPTAでやっているが、事件が起こった前後は非常にムードも盛り上がってみんなで頑張ろうという気になるが、1～2週間も経つとほとぼりが冷めてしまう。何も起こらない状況でも何か危機意識を保つためのポイントはあるのか。

中村教授

これはどこへ行っても出る問題である。特に、PTAで活動するときにはみんな忙しいのでなかなか継続するのが難しい。なかなか妙案はないのであるが、親を動かす原動力だと私が思うのは、自分の子どもが住んでいる地域が危ないという現実だと思う。

お子さんが住んでいる地域は、こういうところで危ない目に遭う地域であるという現実を知ることが、非常に大事だと思う。そのためには、子どもたちが普段の生活の中で、どこで危ない目に遭っているのかということをしきりと調査する必要がある。その方法としては、まず子どもたちに、どこでどのような危ない目に遭ったかということ親の責任で調査するべきだと思う。

私が調査する際には、子どもたちのプライバシーと被害に遭った子どもの保護を考えなければいけないので、学校の授業ではなく、封筒に調査票と学校区の地図を入れて渡し、家へ帰って書いてもらっており、書きたくないという子は書かなくていいことにしている。書き終わったら封筒に入れて、学校の下駄箱か教室の入り口のところに段ボールを置いておき、そこに入れるようにしている。そして集まった資料は、統計的に処理し、その後は責任を持って消去する。

普通の交通事故の調査と違い、特に女の子は性犯罪の被害に遭っている子どももいるので、そういうデータの取扱いには注意しなければならない。また、場合によっては、今は触れられたくないという子どももあり、子どもたちのプライバシーに関わることだから、被害者のプライバシーの保護を考慮して調査をする必要がある。

ほとんどの子どもは、正確に答えてきてくれる。それを知るということは、私たち親にとっては大事なことである。そして、校区の地図中に風俗犯的なものは赤点で印をして、粗暴犯的なものは緑の色で印をし、窃盗犯的なものは黒で印をしておく。そうすると、結構、地域の小学校区なら小学校区の中に、点がずっとあらわれてくる。私は、それを地域安全マップとは言っていない。犯罪危険地図と言っている。まずは危険であるということを親が認識し、地域の大人が認識することがまずは大切である。

こうして整理した地図を見て一番変わってくるのは、若いお父さんである。若いお父さんは、地域のことに関心がない人たちであるが、自分の子どもにだけは関心がある。そうすると自分の子どもが住んでいる地域に、こんなに危ないところがあるという現実を突きつけられたら困ってしまう。会社を休んで我が子の後ろを毎日ついて行くことはできないので、子どもが生活をしている地域の環境を改善していく活動に、自分も参加していく以外に我が子を守ることはできないということにやっと気づくのである。だから私は、親が変わっていくという抽象的な話ではなく、子どもたちが住んでいる地域で、現実に子どもたちが危ない目に遭っているという事実をまず親に教えるための調査が必要だと思っている。

その次には、大人がみんなで危ないところを回る。そして、ここは街灯が必要だとか、ここの廃屋は地主さんと交渉して更地にしてもらう必要があるとか、ここの公園は、樹木を適正に管理してもらう必要があるという活動をする。そして改善計画をつくっていき、それを基に行政と話し合うことをしている。どうやって改善していくのかについて行政や警察と話し合いをすると、予算がかかるものは後になるし、すぐにできるようなことは、みんなで取り組んでいくことになる。そうして、ステップ・バイ・ステップで具体的に危険な環境も変えていくことができるし、その活動を通じて若いお父さん、お母さんから、高齢者や町内会の人たちまで含めて、子どもを育てていく地

域のコミュニティが育っていくと考えている。

そういう取組を本当にやってみたいと思うのであれば、県の地域安全課を通じて相談してもらいたい。

司会

いま一度、盛大な拍手をお願いします。

以上をもって、地域安全まちづくりセミナーを終了させていただきます。